



そして、ジェムザールという新しい抗がん剤が使えるようになった。この薬は、5-FU より腓がんに対し有効で、放射線の感受性を増強させる。このような 30 年余りの臨床研究により、「5 年生存率 50%」という素晴らしい成績が生まれた。今では、T3 ステージだけを対象にしても、5 年生存率 50%である。なお、放射線療化学療法は、現在、世界的に研究が進んでいるが、80 年代に生まれた『2 チャンネル化学療法』は標準療法となっていない。何故ならば、方法がかなり面倒であるからだ。

さらに、「腓がんを早期に発見して治療する」というテーマにも取り組まれている。独自に開発された検査法、手術法により、これまで 20 人の患者さんを治療され、全員が再発なく生存されている。

そして、石川先生の方針は、『常に難治がんをチャレンジすること』。

その他、開設以来、疫学調査を行われている津熊秀明先生。年間肺がんの手術を 230 例行われ、術中迅速切離面洗浄細胞診などの最新技術を駆使されている呼吸器外科の兒玉憲副センター長。新たな診断法の研究に取り組まれている、加藤菊也先生らが紹介されている。また、『とにかくがんから生還しよう！』『どの治療法を選ぶかは、最後は患者さんにお任せして、我々はただひとりひとりを丁寧にきちんと治療して行こう』『我々が挑戦しないで誰がやるんだ』『自分の担当した患者さんとは、最後まできちんと医師として関わる』等、医師としての姿勢も教えてくれ、患者の立場としても頼もしい。

2015 年移転し新しくなる。これが、堀正二センター総長の言葉だ。『がん医療日本一を目指すキーワードは「誇り」です。当センターは、医療スタッフはもちろん、患者さんも誇りを持てる医療機関でありたいと考えています。我々スタッフの側は、「我々は歴史に裏打ちされた高いレベルで最前線の治療を行っている」という自負であり、患者さんは「ここで治療を受けてよかった」という思いです。つまり、双方の質的な「誇り」の充実を、新病院ではよりいっそう追及していきたいと思います。』

本書を通じて、「大阪府立成人病センター」という素晴らしい、誇れる、がん専門病院が西日本にもあることを知っていただきたい。そのことだけで、楽になる。また、医師は、真摯に病気と闘い、患者さんと病気と向き合っていることも知っていただきたい。2 人に 1 人ががんにかかる時代。がんの患者さんもそうでない人も、希望がもらえるであろう。

会員 井上 林太郎